

第6章 熟議に参加した学生と高校生

～変化と成長～

1. 大学生の「熟議」による変化と成長

現代の学生は、現実の社会を実感できる機会が少ない。アルバイト先や単発的なボランティアなどで経験するのは、限定的な人間関係である場合が多いであろう。熟議は、地域の人々、大人や高校生、行政やNPOなどさまざまな機関の関係者などが集い、自由に意見交換する場である。

学生が、そこで出会うのは、地域を支えている人々であり、地域を愛する高校生であり、地域の今後を憂える高齢者であるかもしれない。熟議は、学生が、これらの人々の熱い想いを直接的に感じたり、自分の立ち位置や考えを確認したりすることにより、自分のなかのさまざまな能力を発見したり、自分のなかの変化を自覚できる機会となっている。

本節では、そのような前提に立ち、熟議の事前と事後におこなった自己認識シートや事後アンケート、自由記述をデータとして、学生の変化や成長の様子を記述し、分析する。ただし、あくまでも自己評価であることに留意し、数値だけでなく自由記述による生の声を突き合わせながら、学生の内部に起こったことを描いて行くことにする。

2013年度の熟議では、大学生はワークショップの参加者として16名、ファシリテーターとして12名が参加している。2012年度は、ファシリテーターとしてのみ16名が参加していたが、必要に応じて昨年度との比較も参考にする。

(1) 「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか

1) ワークショップ参加学生（以下、適宜「WS学生」と表記）

ワークショップに参加した学生の自己認識シートをみると、10項目のうちもっとも伸び率が高いのは、「思考力」であり、5点満点（5段階尺度）で+0.82となっている。前半1時間、後半1時間という短時間ながらも密度の高い議論を通して、社会人や高校生、教員など多様な人々と対等にしかも臨機応変に意見を出していくことのできる力、思考力がもっとも強く認識されたようだ。つづいて、「交渉力」の+0.62、「運営力」+0.50の伸びが目立っている【図6-1-1】【表6-1-1】。

一方、「貢献性」は+0.06と最も低い伸びとなっている。「貢献性」のワーディングは『社会の担い手として役割を自覚して、参画する力』であり、シートには評価5の目安として『地域や社会の担い手として、使命感をもった取組みができる』が記載されている【p97 自己認識シート参照】。「貢献性」に関しては、議論を通して、行動レベルまでの自己認識に至らなかったことがうかがわれる。

これらの学生のうち、4名は以前にワークショップ参加の経験があるが、経験のないグループとの伸び率に差は見られなかった。数回程度のワークショップ経験では、メンバー構成やテーマによっても得られること、学んだ内容についての手応えが異なってくるのが予想される。また、このことが能力項目の評価にも影響を与えることも考えられる。

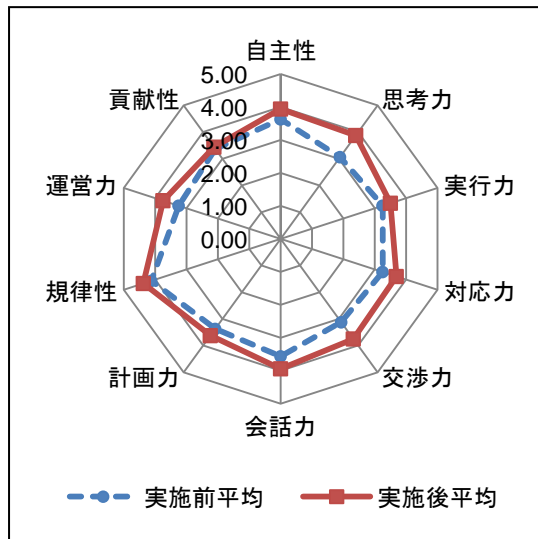


図 6-1-1 WS 学生の能力の変化

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減(※)
自主性	3.63	3.94	+0.31
思考力	3.06	3.88	+0.82
実行力	3.25	3.50	+0.25
対応力	3.25	3.69	+0.44
交渉力	3.13	3.75	+0.62
会話力	3.56	3.94	+0.38
計画力	3.38	3.63	+0.25
規律性	4.13	4.38	+0.25
運営力	3.25	3.75	+0.50
貢献性	3.38	3.44	+0.06

表 6-1-1 WS 学生の能力の変化

2) 学生ファシリテーター

ファシリテーターはワークショップの進行役である。事前の研修では、「自分の意見を出すのではなく、参加者が積極的に意見を出せるよう、議論や雰囲気が盛り上げる」媒介者としての技術を学んでいる。

学生ファシリテーターで最も伸びている力は、WS 学生と同様「思考力」の+0.58であり、「交渉力」+0.33、「規律性」+0.34と続いている。全体として、大学生の参加者や高校生と比較して、どの項目も伸び率が低くなっている【図 6-1-2】【表 6-1-2】。

WS 参加者に比べ、ファシリテーターはある意味では、自主性、実行力、対応力、会話力など自己認識シートにある 10 項目すべてを持ちあわせていなければならない【p97 自己認識シート参照】。すなわち、担当したテーブルの進行がうまく行けば、多くの能力項目が伸びることになるであろうし、その逆にどこかでミスがあったり、全体として不成功の印象があったりすれば、すべての能力項目が低く評価されることが起こるのである。事前研修を通して、他者の意見に耳を傾けながら、あるグループをひとつの方向性に導く技術修得の難しさを実感しているだけに、もともとの目標設定が高く、満足度が低くなり、自己評価が辛くなりやすくなったとも言えよう。

なかでも、「計画力」が-0.08とマイナス評価であることが気になる。ファシリテーターは、ファシリテートする技術は学ぶが、議論するテーマや内容についてそれほど馴染みがない場合もある。また、実際のワークショップでは、さまざまな立場の人がさまざまな角度から意見を交わす。そのとき、どのよ

うな対応をするのか、時間内にどう議論を収めていくのかなどについて、熟議プロジェクトの計画的段階から準備に関わっていなかったことがこの数字に表れていると見ることもできる。ファシリテーター養成を含むプロジェクト運営の次年度への課題と言えよう。

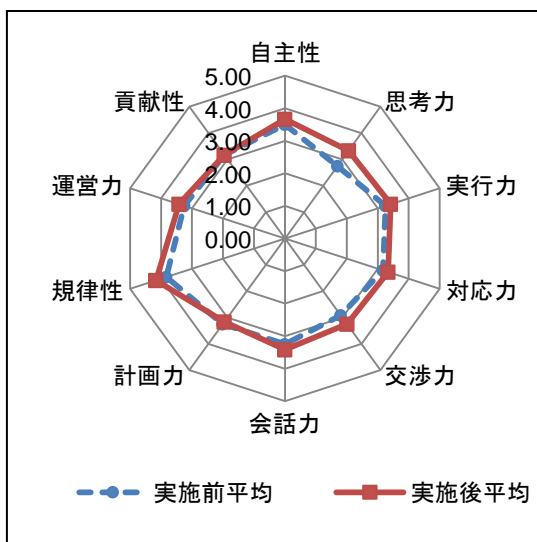


図 6-1-2 ファシリテーターの能力の変化

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.50	3.67	+0.17
思考力	2.75	3.33	+0.58
実行力	3.25	3.42	+0.17
対応力	3.17	3.33	+0.16
交渉力	2.92	3.25	+0.33
会話力	3.25	3.42	+0.17
計画力	3.25	3.17	-0.08
規律性	3.83	4.17	+0.34
運営力	3.25	3.42	+0.17
貢献性	3.17	3.17	+0.00

表 6-1-2 ファシリテーターの能力の変化

ここで、これまでファシリテーターの経験があるかどうかでみた場合、能力の伸びに関する違いはみられるかみてみよう。ファシリテーター12名のうち、6名はすでに1~2回の経験を持っている学生であった。10項目の伸び率を経験の有無別に平均してみると、経験者グループの伸び率の最低点から最高点が(+0.2)~(+0.8)であるのに対して、未経験者グループは(-0.7)~(+0.3)となっている。経験を積むほど、自己評価が高まることがわかる。

2012年度の熟議の学生ファシリテーターの評価では、「交渉力」+0.86、「運営力」+0.79、「規律性」+0.71と、全般的に評価が今年度と比べて高めである。2013年度の10項目の事前事後の差の平均が+0.2であるのに対して、2012年度は+0.49となっている。学生が、評価項目の内容(規準のワーディング)をどのように理解するのか、ファシリテーターの役割がどのように説明されたのか、熟議のテーマや参加メンバーによって経験の成否や印象が異なってくるのかなど、自己評価が左右される要因について、検討していく必要がある。

そこで、次に、事後にワークショップ型で行った振り返りの具体的内容(自由記述)から、熟議による体験について、より直接的な感想や意見をみていくこととする。

(2) 学生は「熟議」という経験をどう捉えているか ~自由記述から~

1) 意見の交換や進行等についての振り返り

グループワークでは、まず「①グループでは、意見を出し合い、話したいことを全て話すことができましたか」について話し合ってもらった。

【WS 参加者】

全体としては、意見をきちんと言えており、グループによっては、事前の準備（強みや弱みについての考えをまとめる）がよくなされており、スムーズに話し合いが進んだとの実感もみられる。

しかし、議論が上手く進み、白熱するほど、「もっと時間があれば深い議論ができたのではないか」との意見が複数出されている。また、「大まかな構造を整理するところが中心になったため、具体的な意見を出すところまで至らなかった」との感想が寄せられている。限られた時間で、意見を分類し、カテゴリー化することに重きがおかれていたことが、グループ討議全体に慌ただしい印象を与え、満足度の低さにつながったようである。

【ファシリテーター】

進行については、主に2点の問題が挙げられた。

一つ目は、「テーマ全体の流れを参加者にうまく伝えることができなかった」点である。これについては、学生が熟議のテーマ内容をきちんと理解していなかった（事前研修において、時間的余裕がなかった）ことが反省点として挙げられよう。そのため、ほとんどのファシリテーターが、シナリオの台詞に気を取られ、自分の言葉で伝えることができていなかったようである。

二つ目は、参加者が積極的に議論に参加し、話し合う場の雰囲気づくりについてである。参加者の発言への「うなずき」を意識した学生は多かったようである。しかし、場の雰囲気を支配しがちな大人の参加者への対応、消極的になりがちな高校生への対応については、苦慮したようである。テーブルについている参加者がバランスよく発言できる工夫についての反省が多くなされている。

なかには、「沈黙がつづいたときには、すでに出た意見を、表現を変えて繰り返して理解を深めたり」と臨機応援に対応したり、「自分はこんなことも出来るんだ！という自信にもつながりました！」と自分のなかの新しい能力を自覚した学生も見られる。

つぎに、「②参加したメリットはどこにありましたか。」について話し合ってもらった。

【WS 学生】

WS 学生は、ファシリテーターとは異なり、意見を出したり、他のメンバーと交流をする観点から感想を書いている。2点ほどにまとめられる。

一つ目は、自分の意見を述べて、受け入れてもらった喜びの一方で意見を出せないでいる参加者への配慮不足への反省など、コミュニケーションのあり方に関するものである。「聞く姿勢（しっかりうなずく、反応する）で話す内容の濃さも異なると感じました」「…そのような否定をしない、相手の話を最後まで聞くなど、これからの就活や社会に出てからも重要になる知識を得る事ができて良かった」

ったです」といった気づきを得た学生もいる。

二つ目は、さまざまな年齢や職業の方々との交流から学んだ点である。「シニアの人でも勉強熱心で大学に通っている人や、地域での様々な活動に取り組んでいる人や、役所でまだ知らない取組みをされていることなどを知れて、とても貴重な経験、交流となった」「個々人によって意見がそれぞれであることがわかったし、個人の意見も年代や性別など生活の形が近いほど似てくるものがあることが見えた」と記述している。

全体として、議論を通して、知らない人との出会い、初めての方と話し合うことで知り合いになれる喜びが感じ取れる。また、これから出て行く社会の様子をイメージする手がかりも掴んだようである。

【ファシリテーター】

自己認識シートでは、「思考力」、「交渉力」、「規律性」が伸びていた。自由記述でも、いろいろな意見をきいたり、まとめたりすることの能力が身についたことが書かれている。たとえば、「今回知らない人達との交流で、最初は恥ずかしさ、緊張、うまくまとめられない不安でいっぱいだったけど、最終的にはそれも減ったかなと思う」「ファシリテーターで、グループをまとめる、進行する、という力を学ぶことができて、…」とある。「規律性」の指標として設定している『異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる』も学びとっていることがわかる。

また、世代間の意見のちがひ、地域ごと（加古川地域とそれ以外の地域の比較）の課題の特色などに気がついた学生も複数見られる。また、これらの議論を通して、自分自身がこれから何かの課題に取り組もうとする意欲や方向性についてのヒントを得た学生もいた。たとえば、「聞く話すだけじゃなくて何か始めてみたいと思うきっかけにもなった」という。

全体として、議論をまとめ上げる手助けをする責任を背負うことにより、良い意味でいやおうなく変化する自分を感じるとともに、自分のなかの課題を確認し、自信をもって学生生活を送ろうとする意欲に影響があった様子がうかがわれる。

2) 熟議に参加する意義について

ここでは、「熟議終了後の学生用アンケート調査」【p116 参照】から、以下の質問の結果についてみていく。

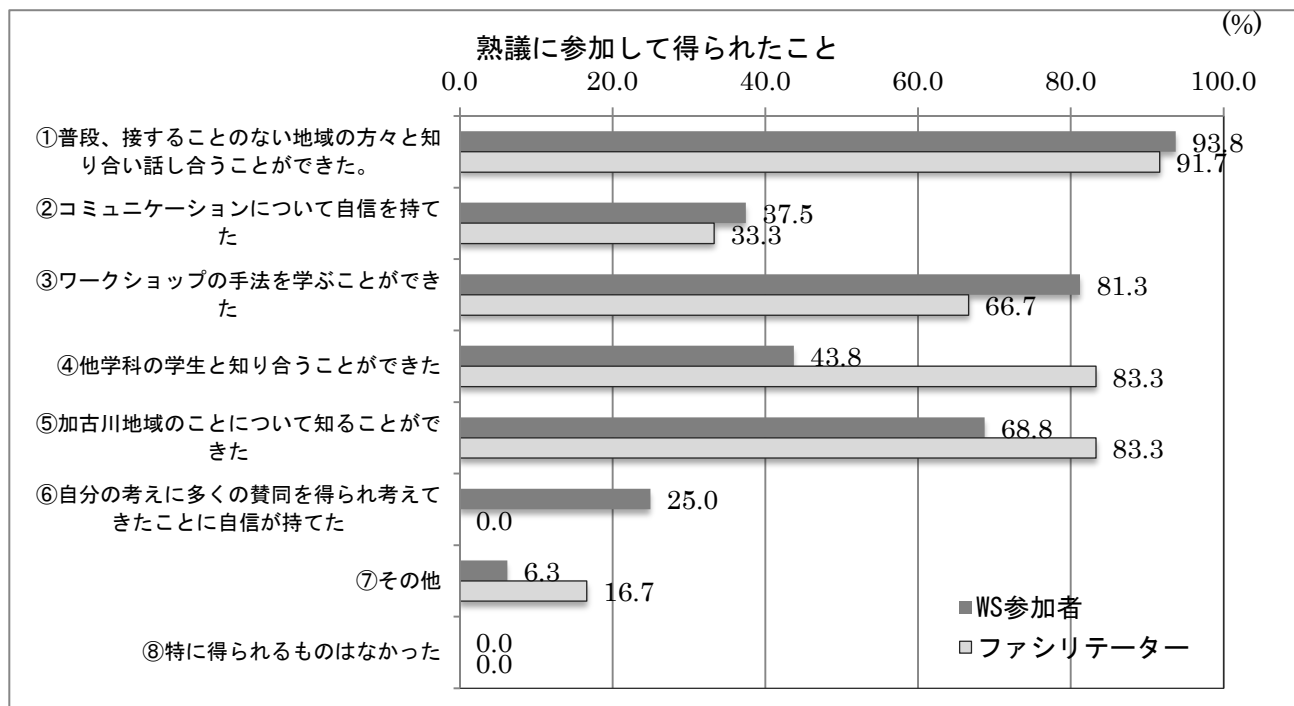


図 6-1-3 熟議に参加して得られたこと

WS 学生もファシリテーターも、「普段、接することのない地域の方々と知り合い話し合うことができた」ことがもっとも高い数値となっている。両群の差に注目すると、WS 学生のほうが、「ワークショップの手法を学ぶことができた」とする比率が 15 ポイント近く高くなっている。これは、WS 参加者の 4 分の 3 はワークショップ初体験であるということが影響していると考えられる。

一方、「他学科の学生と知り合うことができた」については、ファシリテーターの大半が肯定している。学生同士のネットワークづくりや専門性の異なる学生同士の交流に役立つイベントとしても熟議を捉えることができよう。

【今後、熟議などのワークショップに参加をする意向はありますか】

今後、熟議などのワークショップに参加をするかどうかについては、WS 学生は約 80%が「時間や都合が合えば参加したい」と答えているが、残りの約 20%は「参加をしたいが学業が忙しくてできない」としている。一方、ファシリテーターでも約 80%が「時間や都合が合えば参加したい」と答えており、「今後のワークショップに必ず参加したい」とする約 10%と合わせて約 90%が参加に前向きであり、ファシリテーターの役割の充実度が感じられている【図 6-1-4】。今後、学生が参加しやすくするために、正規カリキュラムおよび課外活動などとして位置づけるなど、多様な形態を検討する必要がある。

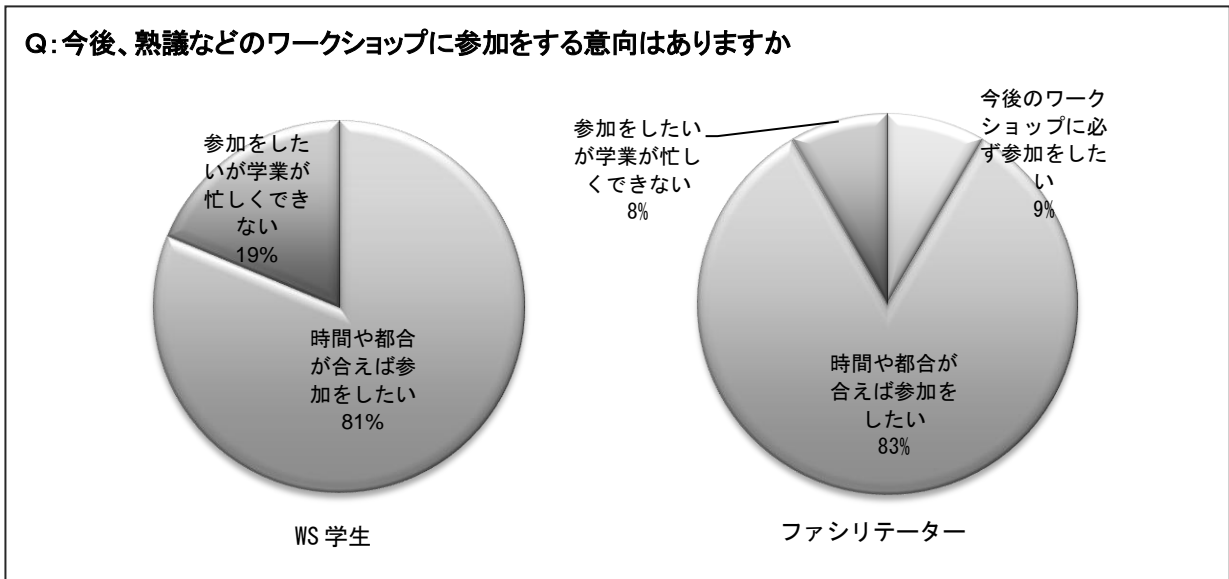


図 6-1-4 今後、熟議などのワークショップに参加をする意向はありますか

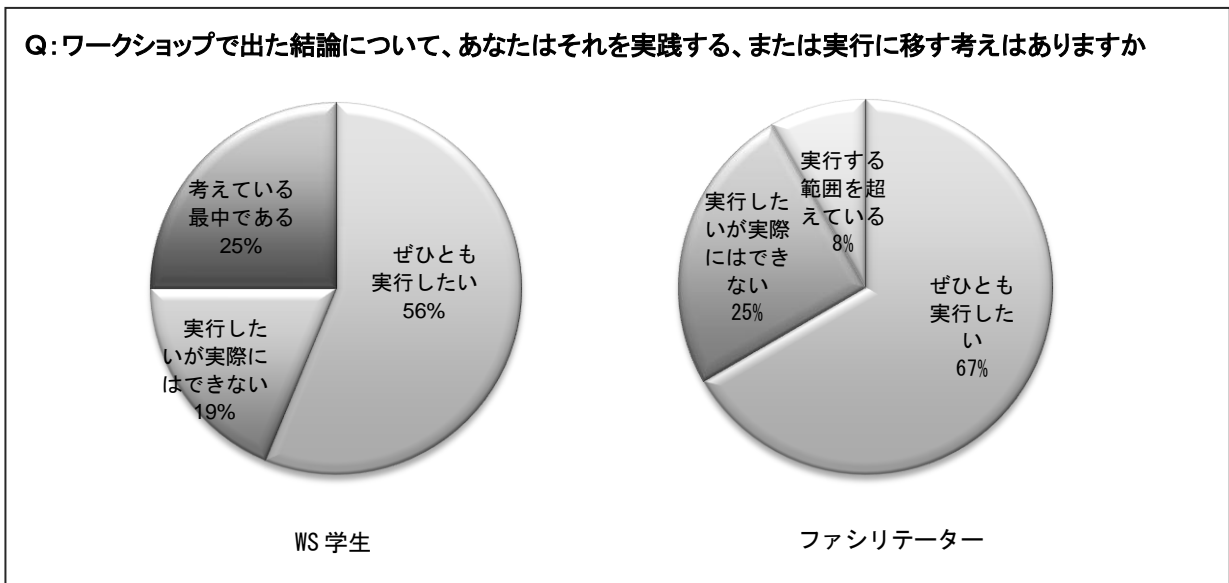


図 6-1-5 ワークショップで出た結論について、あなたはそれを実践する、または実行に移す考えはありますか

【ワークショップで出た結論についてどう感じましたか】

【ワークショップで出た結論について、あなたはそれを実践する、または実行に移す考えはありますか】

「ワークショップで出た結論について」は両グループとも、90%前後が大いに賛同している。また、「ワークショップで出た結論について、あなたはそれを実践する、または実行に移す考えはありますか」については、「ぜひとも実行したい」WS 学生が 56%、ファシリテーターが 67%と比較的高くなっている【図 6-1-5】。ファシリテーターは進行役に徹する役割であるが、参加者の共通理解、合意をまとめあげた実感が課題解決への意欲を強化することに作用しているのかもしれない。

(3) まとめ

自己認識シートの評価では、WS 学生は「思考力」「交渉力」「運営力」が伸びており、ファシリテーターは、「思考力」「交渉力」、「規律性」が伸びている。注目すべきは、WS 学生の方が伸び率が高いということである。上の(2)の自由記述の分析でも見たとおり、WS 学生は、自分の意見を発表し、他者の意見を聴き、学び、交流し、課題を発見するなど、多様な能力が含まれている経験をしていると言える。これに対して、ファシリテーターは、進行役に徹し、最終的に議論を成功させ、まとめるところまで導くことに集中しなければならない。このことから、WS 学生ほど余裕がなく、反省事項が自ずと増えてしまっているのではないか。その結果、自己評価は伸び悩むことになる。

そこで、今後の熟議に参加する学生に関しては、ファシリテーターの養成が課題として浮かび上がってくる。上でみたように、経験を積むほどに自己評価が高くなることは自然なことである。しかし、今回はシナリオ自体をよく理解できなかったファシリテーターが多かった。解決策としては、プロジェクトの初期、テーマ決定時から学生に参加してもらい、テーマを自分のものとして感じてもらうことが考えられる。

また、「今後、熟議のようなワークショップに参加したいか」については、「時間が合えば」、「授業が忙しい」との意見が多く見られた。今後、大学教育では、アクティブ・ラーニングに力を入れ、講義だけでなく演習形式の教育方法の開発が重視されていく方向性にある。熟議のようなイベントに単発的に参加させるだけではなく、学科カリキュラムあるいは全学レベルの科目に組み込む形で能力開発ができないか、今後の課題であろう。また、自由記述にあるように、学生同士のネットワークづくりや学び合いの成果にも注目しておく必要がある。

また、今回話し合われた、加古川地域の「強み」と「弱み」を理解したうえで、結論として得られた課題について、実践・実行する気持ちを持っている WS 参加者が 56%、ファシリテーターが 67%と高率である。事前準備をして、密度の高い議論を行うことで、地域への関心、活動参加の意欲が高まったことは個人的成果として素晴らしいことである。一方、熟議がより計画的で積み上げ型に実施されていくことが、地域の課題の発見と解決につながる可能性を高めると言う意味でも、今回は一定以上の成果を得たものとする。

2. 高校生の分析

(1) 「熟議」に参加した高校生の特徴

今回参加した高校生は、加古川地域 2 市 2 町にある高校に通う生徒を中心とした公立高校 26 名と私立高校 2 名の計 28 名である（男子 12 名、女子 16 名）。また、学科でみると、普通科 23 名（うち理数科系 7 名）、その他（総合学科など）3 名、不明 2 名となっている。「熟議の内容を含めよく知っていた」生徒は 3.6%であり、今回の熟議参加で知ったとする者が 75%を占めている。

「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加した理由は、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」がほとんどである（96.4%）。それでは、熟議の本番であるワークショップの経験についてはどうであろうか。「ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験」をしたことがほとんどない者が 64.3%を占め、「機会が少ないが、現在でも経験することがある」「以前には経験したことがあるが最近はない」を合わせると 32.2%となっている。

また、今回のテーマである「地域」については何らかの関心や活動経験があったのだろうか。「過去1年間、あなた自身が居住されている地域に関わる活動の機会はございましたか」の問いでは、12人（42.9%）が「機会があった」と答えている。平均的な高校生像から見れば、比較的高い数値と言えるのではないだろうか。その活動の具体的内容を複数回答でたずねたところ、「学校や職場の行事や事業としてある地域活動」（8人）が最も多く、「地域に関わるボランティアやNPOでの地域活動」（6人）が第2位となっている。

ここまでのデータをみると、参加した高校生は「他の人に勧められて参加したが、ワークショップ形式の話し合いの経験は少ない。しかし、地域での活動経験のある者が4割を超えている」という特徴もっている。

事前アンケートによると、「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点は、「多様な考えを知る機会がある」（82.1%）と捉えており、悪い点は「わからない」が 25.0%、「議論だけではまとまらず決められない」（21.4%）と考えている。地域のさまざまな年齢層の人々が集い、直接的な話し合いの手法への期待や積極的な参加意欲がこの数値に表れていると思われる。

(2) 高校生は「地域」についてどう考えているか ～熟議前と熟議後～

実際の議論を行う前に、地域についてある程度考えるプロセスを踏んでもらうための事前アンケートを実施した。これは、第3章で述べたように、「前もって、本やインターネットなど必要な資料を調べて情報を入力し、これまでの経験や知識を引っ張り出し、ワーキングメモリを準備状態にしておくウォーミングアップは必要」との考えからである。

以下では、地域についての考え方がどのように熟議前と熟議後で変化したのか見ていく。地域に対する10項目の考え方（設問）を示して、賛成か反対かをたずねた結果をひとつずつに見ていく。また、最後にこれらの項目を全体として考察する。

設問①「自分の住む地域に対し、誇りをもつことは素晴らしいことである」

「大いに賛成」が事前では 60.7%であったが、事後には 71.4%と 10ポイント以上増えている。議論を通して、地域をより身近に感じることができたことに因るのではないだろうか。【図 6-2-1】

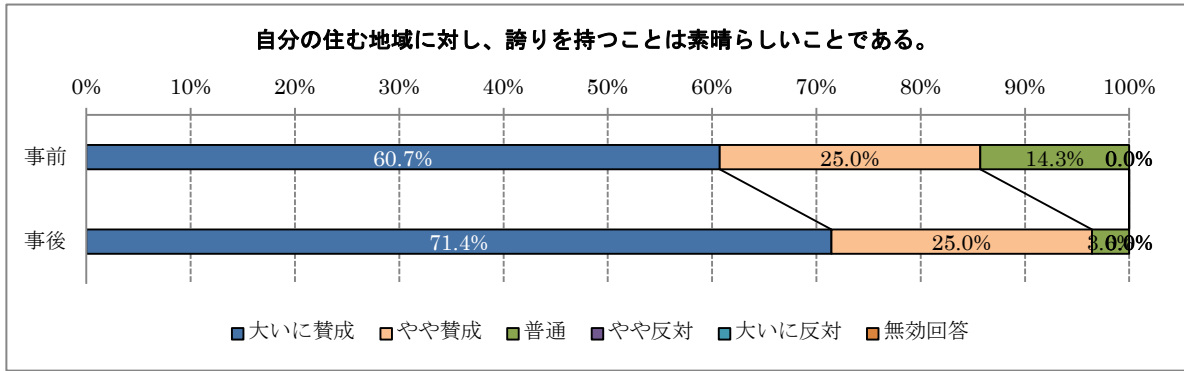


図 6-2-1 自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである

設問②「地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである」

「大いに賛成」は事前では 14.3%であったが、事後では、7.1%に減っている。一方、「やや賛成」が 25.0%から 46.4%へと大幅に増えている。この両方を合わせると、39.3%から 53.5%へと 15 ポイント近くも増加している。議論では、加古川地域の「強み」と「弱み」を話し合ったが、その結果は、「強み」と「弱み」が表裏の関係であったり、課題解決が見えにくかったりといったことを経験したことが事後の結果に影響を与えている可能性もある。【図 6-2-2】

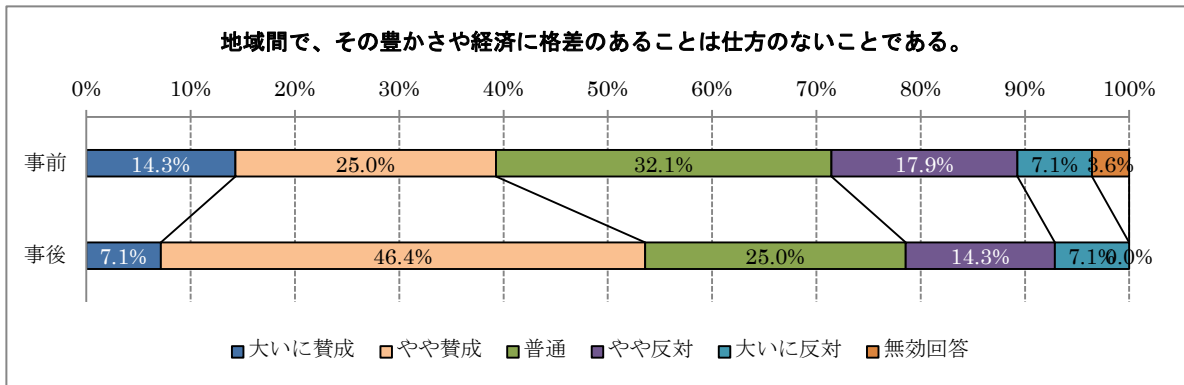


図 6-2-2 地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである

設問③「住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である」

46.4%と約半数が「大いに賛成」としており、「やや賛成」35.7%を含めると 80.0%を超える。やはり、地域には住民のつながりや信頼関係が重要と考えている。事後では、「大いに賛成」「やや賛成」の合計が 85.7%とやや増えた程度である。本項目は、地域に関するイメージの核のような考え方であることから、あまり変化が見られなかったと捉えることができよう。【図 6-2-3】

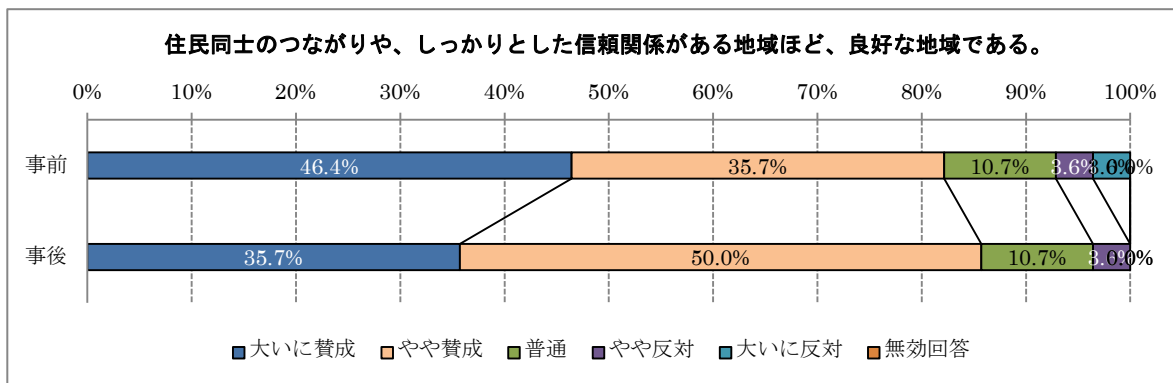


図 6-2-3 住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である

設問④「他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる」

「大いに賛成」と「やや賛成」を合わせて見ると、事前では、50.0%であるが、事後では75.0%と他の参加者種別（行政、民間・市民活動、高齢者大学、大学）に比べて大幅に伸びている。他地域からの転入者に対しては若い世代の方が柔軟に対応できているのかもしれない。【図 6-2-4】

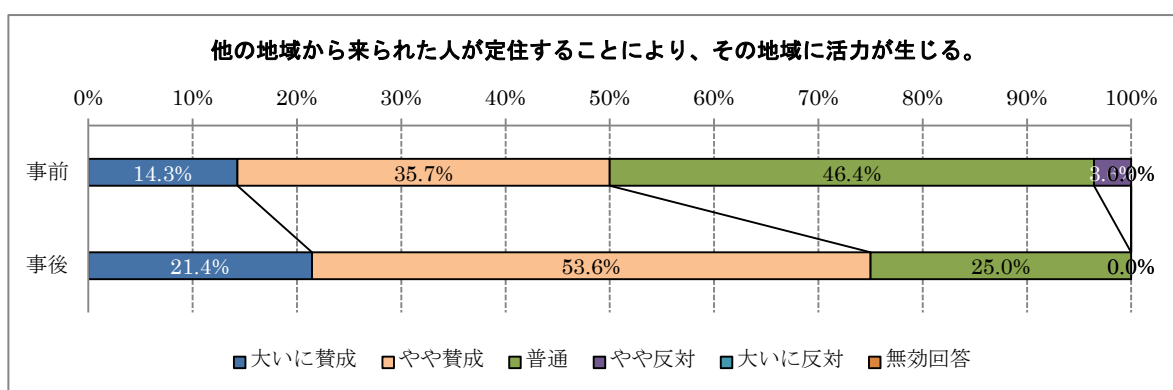


図 6-2-4 他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる

設問⑤「地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい」

「大いに賛成」と「やや賛成」を合わせて見ると、事前では、46.4%であるが、事後では71.4%と大幅に増加している。ここでも、地域の住民の方々から直にお話を聞くなかで、「地域」そのものを身近で現実的に捉えられたことが反映しているとも解釈できよう。【図 6-2-5】

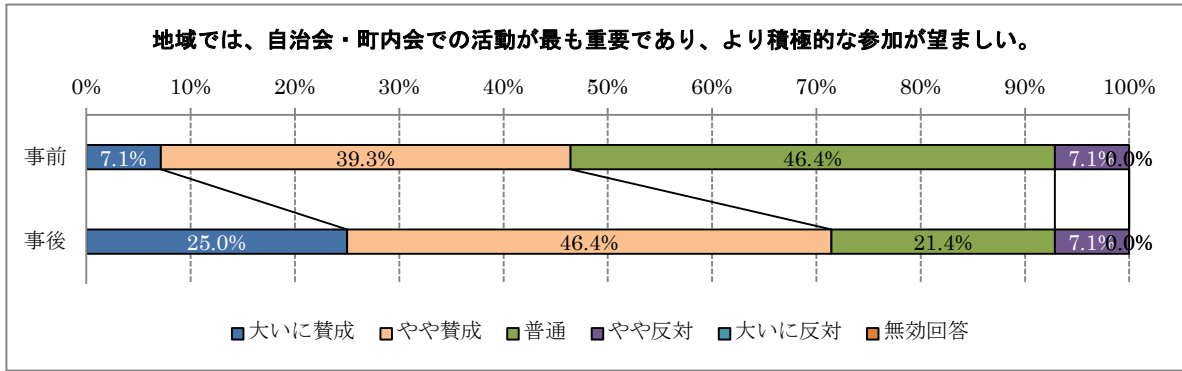


図 6-2-5 地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい

設問⑥「住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である」

この考え方に「大いに賛成」する者は事前で、7.1%にとどまっております。「やや賛成」7.1%と合わせても14.2%である。一方、「やや反対」39.3%と「大いに反対」14.3%を合わせると53.6%である。事後には、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」21.4%を合わせて、28.5%と地方自治体への期待が増加している。地域の課題をだれがどのように解決していくのかを具体的に考える過程のなかで、ステークホルダーとしての行政の存在についても認識が高まったのではないかと考えられる。【図 6-2-6】

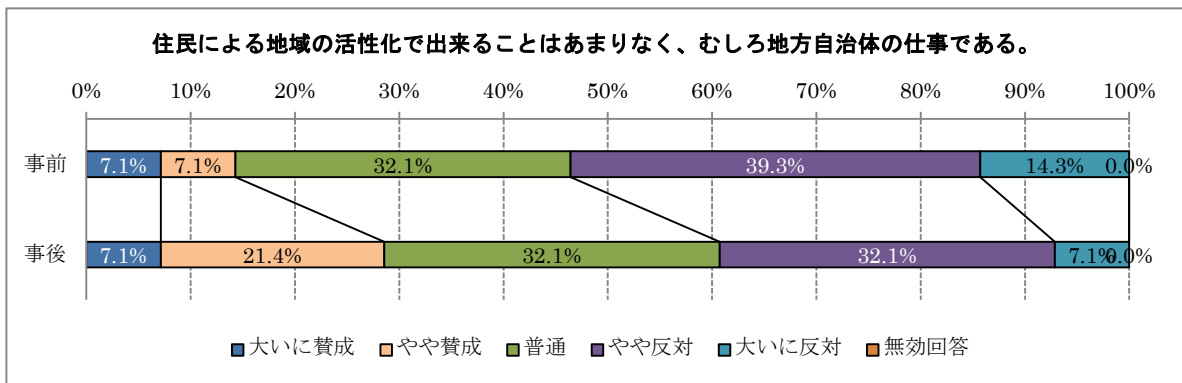


図 6-2-6 住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である

設問⑦「地域の再生や良好な環境を築くためには、自治会などよりも、NPO などの非営利の組織が重要になる」

事前では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」3.6%を合わせても10.7%程度にとどまっていたが、事後では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」32.1%を合わせて39.2%に達し、30ポイント近く増加している。今回の参加では、まず、地域におけるNPOや民間組織などの組織の存在を知ったこと、意見交換を通して、地域の問題解決のための新しい選択肢やヒントを得たことがこの結果を導いたのではないだろうか。【図 6-2-7】

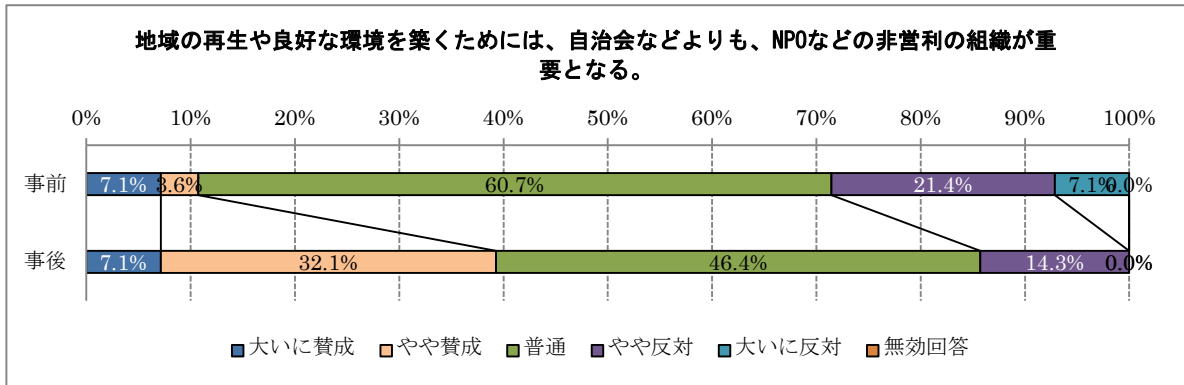


図 6-2-7 地域の再生や良好な環境を築くためには、自治会などよりも、NPO などの非営利の組織が重要となる。

設問⑧「地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援は、住民を受け身にさせるだけである」

事前では、「大いに賛成」3.6%と「やや賛成」7.1%を合わせても10.7%程度にとどまっていたが、事後では、「大いに賛成」3.6%と「やや賛成」21.4%を合わせて15ポイント近く増加している。一方、「やや反対」「反対」を合わせると、事前の53.6%から、事後の35.7%へ減少していることから、外部からの支援が住民を受け身にすると考える高校生が増え、つまり外部からの支援に頼らず自分たちで解決する志向性が強められている傾向が見て取れる。【図 6-2-8】

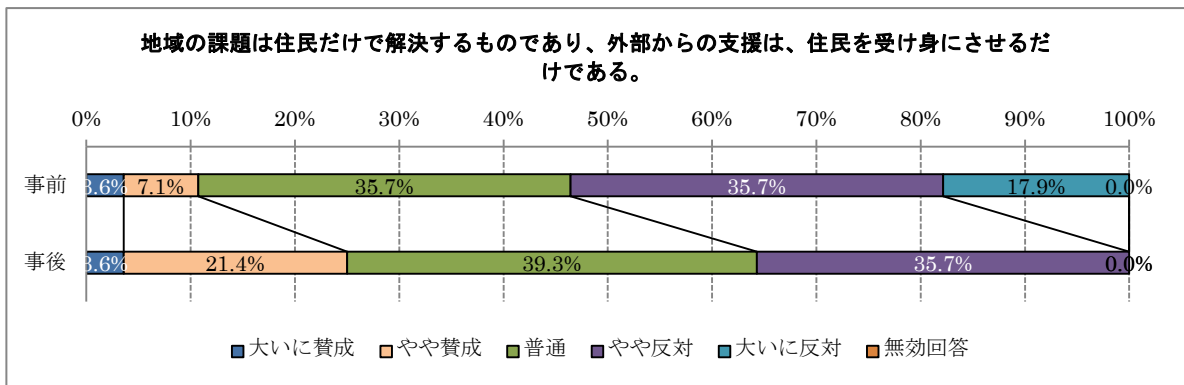


図 6-2-8 地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援は、住民を受け身にさせるだけである

設問⑨「古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい」

事前では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」17.9%を合わせて25.0%となっているが、事後では合計で35.7%と11ポイント程度増加しているのが目立っている。議論を通して、地域への愛着が増したり、地域のまとまりの良さに対する肯定的なイメージが増幅したとも考えられる。【図 6-2-9】

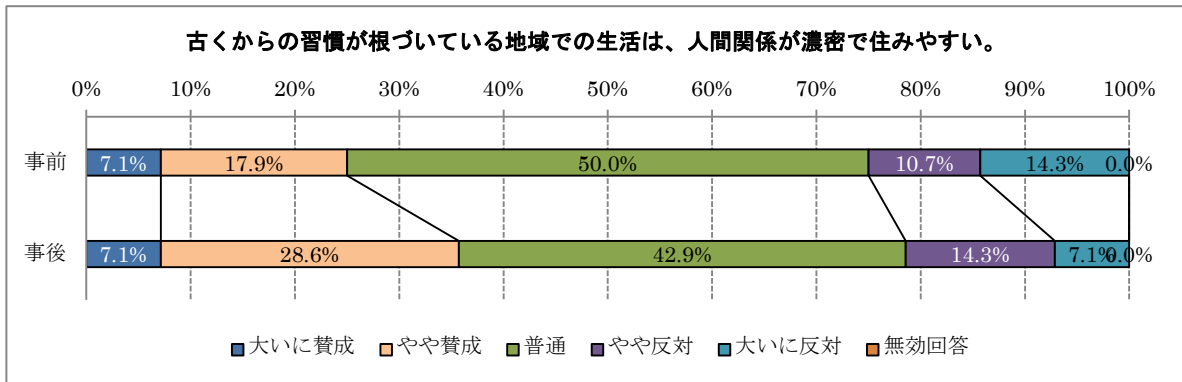


図 6-2-9 古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい

設問⑩「大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる」

事前では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」28.6%を合わせて 35.7%となっているが、事後では合計で 60.8%と約 25 ポイント増加し、肯定派が過半数をはるかに超える変化が見られた。今回の熟議は大学が主催し、大学という場所で開催されていることの直接的な影響が大きかったのではないかと。「大学生」が 20.0 ポイント増、「高齢者大学」は 12.5 ポイント増、「民間/市民活動」では 7.2 ポイント増、「行政」はほとんど変化なしといった結果に照らしてみると、若いほど、議論を行ったことの影響が強い。

しかし、肯定の度合いでみると、「大学生」が 60.0%→80.0%、「高齢者大学」は 87.5%→100.0%、「民間/市民活動」では 78.6%→85.7%、「行政」は 84.6%→84.7%と、事後の数値は高校生がおおよそ 60%にとどまったのに対して、80.0~100.0%に達している。今後、大人たちが地域の課題解決に寄与する事業や施策を展開していくことへの多大なる期待が明らかである。一方、高校生の数値は大学についての充分なイメージをもつことができていないことの表れであろう。【図 6-2-10】

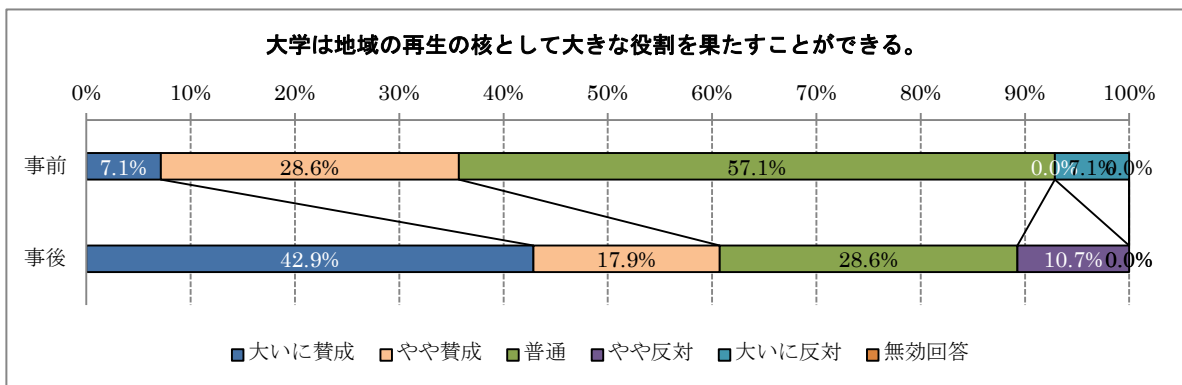


図 6-2-10 大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる

ここまで、事前と事後の変化に着目して項目別に見てきたが、全体を事後の肯定の度合い（「大いに賛成」＋「やや賛成」）によって見ることににより、参加した高校生の地域に関する考え方をまとめておく。

参加した高校生は、「自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである」と考え(事後 96.4%)、「住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である」と捉

えている(事後 85.7%)。「地域間格差は仕方がない」(事後 53.5%)が、「他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる」とする(事後 75.0%)。地域の活性化や良好な環境づくりには、自治会・町内会活動(事後 71.4%)が重要とする一方で、「NPO など」(事後 39.2%)や自治体の働きへの期待(事後 28.5%)は低めの数値にとどまっている。地域の外部からの支援については、意見は分かれており、地域における人間関係については、濃密であるほうが住みやすいと考える者は 35.7%にとどまっている。

全体として、高校生の地域への関心は高く、熟議を経験して、より一層それが強まった様子が伺われる。住民同士のつながりをもつことは重視されているが、必ずしも「濃密」であることは支持されていない。加古川地域の高校生は、『匿名性の高い大都市のような「地域」ではなく、適度な距離感をもった人間関係、近所づきあいにより地域での生活を送る』イメージを持っていることがわかった。

(3)「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか ～熟議前と熟議後～

本節では、高校生と大学生のみに実施した自己認識シート【p97 参照】(10 の能力項目からなる自己評価による能力評価シート)のデータから、熟議に参加したことによる能力の変化を見ていく。熟議前と熟議後では、どのような能力が伸びたのか、あるいはそれほど伸びなかった能力はどれか。熟議には、テーマがあり、なんらかの課題を解決するための道筋をつける、方策や結論を見出すという成果物がある。しかし、まだまだ成長過程にある高校生や大学生にとっては、熟議の形態、手法、人との出会いなど経験全体が能力の伸長を促進するという効果が期待できる。すなわち、熟議の「教育効果」である。これについては、昨年度の「熟議 2012 in 兵庫大学」でも検証されている。

本節では、大学生との比較も行いながら、高校生の熟議前後の能力変化について見ていく。

1) 全体的傾向

高校生の参加者では、「貢献性」が+0.67 と最も高く、「交渉力」+0.60、「規律性」が+0.54 と続いている。高校生は、テーマへの関心を持ち、意見を発表する意欲自体が高い者が参加したと見られる【図 6-2-11】【表 6-2-1】。実際に、各グループの高校生の発表では、加古川地域の将来について純粹に、そして真剣に取り組もうとする姿が多く見られた。「貢献性」が第一位となったことはうなずける結果である。

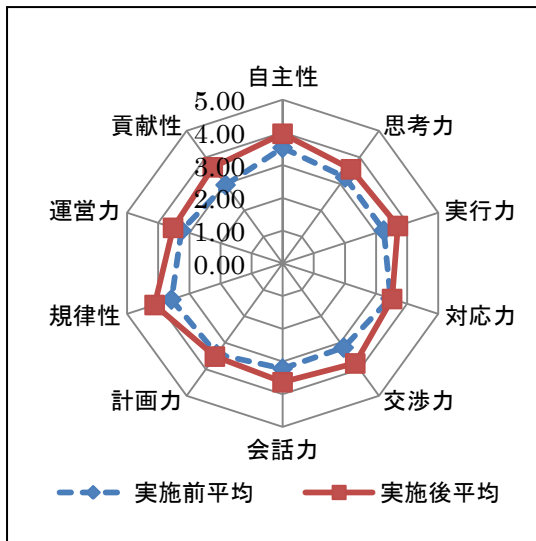


図 6-2-11 高校生の能力の変化

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.54	3.96	+0.42
思考力	3.25	3.56	+0.31
実行力	3.25	3.70	+0.45
対応力	3.46	3.52	+0.06
交渉力	3.18	3.78	+0.60
会話力	3.21	3.63	+0.42
計画力	3.43	3.52	+0.09
規律性	3.57	4.11	+0.54
運営力	3.25	3.52	+0.27
貢献性	2.96	3.63	+0.67

表 6-2-1 高校生の能力の変化

大学生のデータと比較をすると、どのような違いがあるだろうか。ここでは、大学生のうちファシリテーター（以下、F 学生）と、ワークショップに討議者として参加した学生（以下、WS 学生）との比較をしながらみていくことにする。

2) 伸びた能力

F 学生と WS 学生は数値に幾分の違いがあるが、伸びたと自己評価している能力は共通している。すなわち、「思考力」「交渉力」「運営力」である。このうち「思考力」は、F 学生が+0.58、WS 学生が+0.82 と伸び率が最も高い。一方、高校生では、上述のように「貢献性」が+0.67 と最も高く、「交渉力」、「規律性」が続いている。大学生と高校生では、伸びている能力として「交渉力」は共通しているが、他の 2 項目「貢献性」と「規律性」は異なっている。以下では、違いに着目して、2 つの能力項目の特徴を詳しくみていく。

まず、「貢献性」は、「社会の担い手として役割を自覚して、参画する力」であり、自己認識シートにおける能力評価の例示としては、第一段階「地域や社会に参画することの意義や役割について理解している」、第二段階「地域や社会に参画して、自分の役割を果たそうとする意志がある」、第三段階「地域や社会の担い手として、使命感をもった取り組みができる」となっている。第一段階から第三段階に向かって、評価は高く設定している。「貢献性」は、いいかえれば地域や社会への貢献であり、熟議に参加していること自体がそれを実感させてくれる経験であることから、最も高く評価されたことが予想される。

つぎに、「規律性」とは「社会のルールや人との約束を守る力」を指している。自己認識シートにおける能力評価の例示としては、第一段階「社会のルールやマナーの必要性を理解し、それらを守ることができる」、第二段階「他者に社会のルールやマナー、また約束を守るよう促すことができる」、第三段階

「異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる」となっている。高校生が経験したのは、熟議の議論のテーブルにおいて、手続きや時間が管理されたなかで、自分の意見を発表する、人の考えに耳を傾けるということである。ワークショップ手法そのものから影響を受けた様子うかがわれる。

これに対して、学生は「思考力」＝「問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力」が最も伸びたと自己評価した。「思考力」には、情報収集力、分析力、問題解決力などが含まれており、大学において常に意識して身につけることが求められる能力である。つぎに、高く評価したのは「交渉力」である。これは、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」である。大学段階では、人間関係もボランティアやアルバイト、大学での授業におけるインターンシップやフィールドワークなど地域や社会とつながる者が多くなる。社会にでる一歩手前において、「交渉力」に焦点が当たっているのは当然とも言えよう。

3) 変化がなかった能力

それでは、熟議前と熟議後であまり変化のなかった能力にはどのようなものがあるのだろうか。最も変化がなかったのは、「対応力」+0.06 であり、「計画力」+0.09、「運営力」+0.27 とつづいている。

「対応力」は自己認識シートでは「状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力」と定義している。また、評価段階は、第一段階が「相手やその場の状況を配慮しながら、柔軟に対応することができる」、第二段階「自分の役割と他者の役割を的確に判断し、取り組むことができる」、第三段階「物事が良い方向に流れるよう、まわりに働きかけることができる」と設定している。

高校生にとっては、年長者や大学生とともに、同じテーブルで意見を述べるということ自体緊張することであろう。全体の様子を見て、適切なタイミングで場に則した内容の発言をすることは訓練が必要なことである。「対応力」は、高校生にとっては、まだまだ難度の高いスキルを伴う能力といえるだろう。

「計画力」は、「現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力」であるが、今回、事前にテーマについて考え、ディスカッションのイメージは持っていた高校生も多いであろう。しかし、テーブルで議論を進めていく役割はファシリテーターであることが明確であり、その意味で、高校生自身の振り返りでは、能力が伸びなかったというよりは、「該当しない」ということであつたかもしれない。このことから、今後、参加者の属性（とくに年齢段階）や熟議における役割に合った評価尺度の検討もなされる必要があるであろう。

一方、大学生において、変化が少なかった能力項目は、WS 学生で見ると、高校生とは対照的に「貢献性」が+0.06 と最も伸びが低くなっている。続いて、「実行力」「計画力」「規律性」が同値で+0.25 となっている。また、F 学生では、「計画力」-0.08、「貢献性」+0.00 となっており、「自主性」「実行力」「会話力」「運営力」は同値の+0.17 であつた。議論者かファシリテーターかにかかわらず、評価の低い能力には大学生同士で共通性が見られる。このことは、熟議における役割と関連付けられた能力への着目ではなく、熟議に参加することをどう捉えているのか、参加することにどのような意義を見

出そうとするのか、という目的意識が評価結果と関連していることを示唆している。言い換えれば、高校生が熟議に参加すること自体を地域への「貢献（性）」として結びつける一方、大学生では、大学での学びに必要な「思考力」やキャリア開発に必要な「交渉力」を磨くといったインセンティブを感じての参加であったとも見ることができる。

以上をまとめると、大学生と高校生では明らかに年齢段階と熟議参加に対する目的意識のちがいによる能力評価の差異が見られる。今回は、事前事後の能力評価を高校生と大学生で同じ自己認識シートを用いて行った。今後、高校生の能力評価においては、参加の目的意識に応じて分析するためのアンケート項目の設定や、事後インタビューなども含めて、今後、評価方法の精緻化を検討していく必要があるであろう。

(吉原恵子)

3. コメント～学生の振り返りからみる成果と課題～

「熟議 2013 in 兵庫大学」参加者アンケート（事後）【p111 参照】において高校生・大学生がファシリテーターとして、また参加者として「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加することそのものに意義があることは明らかにされたところである。本節では、このアンケートによる統計調査に加え、学生ファシリテーター及び大学生参加者の「コメント」や、学生の「振り返りのためのグループワーク」【p115 参照】のデータを参考にしながら、本プログラムに大学生が参加したことで有意義であった部分と、課題とされた部分について整理していきたい。

(1) 成果

まず、学生ファシリテーターに焦点を当てる。学生ファシリテーターを担当した学生の成果は ①ファシリテーションの理解 ②役割意識の萌芽 ③自分に対する自信、の3点に集約することができる。以下に詳細に述べていく。

1) ファシリテーションの理解

ファシリテーション (Facilitation) には「促進する」という意味がある。ファシリテーターを担当した学生のコメントを読み進めていくと、「あいづち」をうつこと、沈黙を打破すること、特定の人ばかりが話し続けないよう配慮すること、既に出た意見を言い換えて分かりやすくする工夫、といった話し合いの構成要素や、話し合いを活発にするための所作についての気づきと考察が多く見受けられる。こうしたことが振り返りで述べられているということは、特にこのような所作が話し合いを構成し、また促進するということを学生たちが実践的に理解する機会になりえていたということを示す証左である。

2) 役割意識の萌芽

ファシリテーターを担当した学生は、重要な役割意識をもって議論に参画することになる。とりわけ、

高校生が参加していることを強く意識していた学生ファシリテーターが多く、大学生として高校生と積極的に関わり、またサポートしていくという姿勢をコメントの中に見ることができる。実質的にはそれがうまく果たせず、ストレスを感じている学生も見受けられたが、このことが、ファシリテーターとしての自分の存在意義のひとつであり、自己肯定感を高める要因として機能していたと言える。

3) 自分に対する自信とグループ構成員に対する信頼

異世代の参加者が語り合うことが「熟議 2013」でも重要なポイントであった。学生ファシリテーターにとってシニア世代の参加者によるサポート、高校生の積極的な発言が「ちから」となって有意義な時間を過ごすことができたというコメントが多数寄せられていた。多世代の人々と出会い、関わる中で新たなことを知り、自信となっていくという道筋をコメントの中に見ることができた。

WS（ワークショップ）参加学生については、事前に考えてきた「強み」や「弱み」については、概ね積極的に発言できたという感想を持っている。とりわけファシリテーターと協力的な状況をつくれたグループに参加した大学生はワークショップに対しても肯定的な印象を持っているようである。

(2) 課題

成果に対して課題は、質問紙調査でも分析が困難な部分である。しかしながら、本プロジェクトを学生の学び、成長にも寄与するものとして位置づけている以上、課題についてもしっかりと言及・省察しながらプロジェクトを進めていかねばならない。そこで、ここでは寄せられたコメント、振り返りのデータより「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加した学生の感じた個人的・構造的課題についてまとめておきたい。

1) 臨機応変

今回のプロジェクトでは、ファシリテーションの進行表を前もって作成し、その進行表に沿ってトレーニングプログラムを企画、実行した。このことによって、進行の見通しが立ち、円滑な話し合いの運営ができた学生も少なくないであろう。しかし一方で、進行表通りにいかない場面に直面した際の臨機応変さに課題を抱える学生たちもすくなくなかったようである。また、進行表に忠実に進行しようとするあまり、議論の調整に集中できなかつたり、時間ばかりを気にしてしまつたりした学生もいたようである。今後の課題として、こうした進行表の作成と、臨機応変な議論の組み立て方、進行の仕方、切り返し方を学ぶ機会も必要となるだろう。

2) 自分も理解できていないことを進行する難しさ

話を進めるということに関する重要な気づきを経験した学生が多かったことは先述の「成果」の部分で述べたとおりである。そうした気づきに対して鋭敏に察知できるようになるのは良いことであるが、同時に議論の内容について把握していなければ進行が極めて難しくなる、ということに気づいた学生もいたようである。つまり、ファシリテーター自身のなかに議論する話題に対し、関心をもち、事前に学びを深めておく準備が不十分であったということをも2点目の課題として指摘することができる。当然議論は深まっていく。深まれば深まるほど促進者としてのファシリテーターの進行にはバリエーションが

求められる。たとえば「なにかご意見はありませんか」という問いばかりでは対応できず、「このことについては～のような議論もあるかと思いますがいかがでしょうか?」といったような働きかけも求められるだろう。そうした際の対応についても考え、準備しておくことについての反省があった。

3) 話題の乏しさとそれを補う情報の少なさ

学生ファシリテーターであれ、WS 参加学生であれ、議論に参加する中で話題、また話題を補う情報の多さというのは重要である。参加学生の「深めることができなかった」という感想の背景にはおそらく「話題の乏しさとそれを補う情報の少なさ」があったように考察できる。大学生として高校生を支えていくためにも、シニア世代と意見交換をしていくためにも「大学生としてのアカデミックな情報」は重要な役割を果たすものとなるであろう。今後、「熟議」を展開していくうえでも、アカデミックなレベルでの情報交換のやり取りの萌芽を目指す準備が求められるであろう。

(小林洋司)